

# 酪農家 Dairy Farmer

名前  
くらもと たかふみ  
**倉本 敬史さん(馬水北)**  
就農歴  
**10年**

日本の食卓や給食のメニューの定番となっている牛乳。『父の日は牛乳を贈ろう』というキャンペーンも毎年行われるなど、牛乳は私たちの生活に深く浸透している。倉本敬史さんは、毎日新鮮な牛乳を食卓に届けている酪農家。今回は酪農の仕事について聞いた。

## 酪農家の朝は早い

倉本さんは毎朝6時ごろには牛舎にいるそう。牛舎では40頭の牛を飼育している。巨大なファンで換気しているため中は涼しく、気になる匂いもない。

「牛に食事を与えないといけないので朝は早いですね。早起きは慣れです(笑)」と倉本さんはさらり。

「食事後は乳搾り。うちは日に2回、機械を使って搾乳しています。牛にも性格があって採れる乳の量が違いますし、ストレスの有無でも変わってきます」平均すると牛一頭あたり一日30kgほど牛乳が採れるそう。それを業者が回収し、店頭で販売される。

## おいしい牛乳は愛情の証

酪農で大変なことは「牛の状態を把握すること」だという。牛は非常にナイーブな動物のため、気温や騒音、ハ工などの虫でストレスを感じてしまうそう。

「一見元気な牛でも状態が悪い場合があります。フンの状態などで『食事は足りているか』や『病気ではないか』など、原因を探すためには観察力が重要です」

月1回ほど牛乳の成分検査が行われるが、その数値が良くなっていくことで自分の成長を実感できるそう。だ。「手間と愛情をかけた分だけ、牛は返してくれる。失敗したことを忘れず、次に繋げていくことが大切」と倉本さん。検査の結果は酪農家の通知表だ。

「農家や酪農家は後継者不足が問題になっていきます。私も早く結婚して、酪農家の3代目として跡を継いでいきたい。酪農家や関係者全体がさらに盛り上がり、酪農業が発展していければうれしいですね」

▶(左写真) 食事の準備をする倉本さん。お腹をすかせた牛たちの視線が集まる。

▶(右写真) 屋寝中の牛たち。満腹になったら順番に眠っていく「むにゃむにゃ」と口を動かし、反すうする。牛の健康上で、この反すうがととも重要という。

